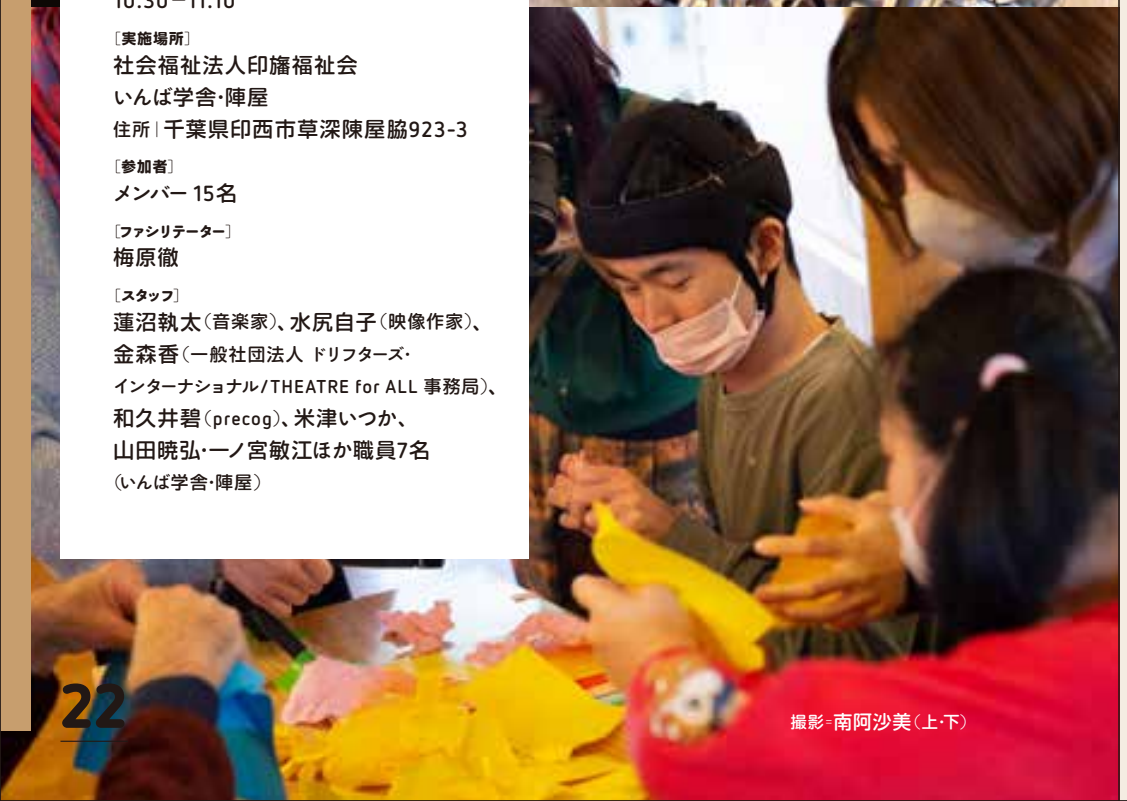


印旛福祉会 いんば学舎・陣屋

［実施日］
2022年10月28日（金）
10:30－11:10

［実施場所］
社会福祉法人印旛福祉会
いんば学舎・陣屋
住所｜千葉県印西市草深陳屋脇923-3

［参加者］
メンバー 15名

［ファシリテーター］
梅原徹

［スタッフ］
蓮沼執太（音楽家）、水尻自子（映像作家）、
金森香（一般社団法人 ドリフターズ・
インターナショナル/THEATRE for ALL 事務局）、
和久井碧（precog）、米津いつか、
山田暁弘・一ノ宮敏江ほか職員7名
（いんば学舎・陣屋）

撮影＝南阿沙美（上・下）

ねらい

・視覚的な情報から音を出す行為を促す。
・紙を使って自由に音を出したり、音楽に合わせて紙を動かし、セッションの時間を楽しむ。

工夫のポイント
（梅原・米津）

・自分が出した音をきちんと認識できるように、マイクとスピーカーを用意した。
・A4サイズで厚すぎない紙を使い、手の力が弱かったり、可動範囲が狭めの人にも扱いやすいものを選んだ。
・カラフルな紙を用意し、破いたり使用したあとも紙片がごみに見えないようにした。

参加者の特徴

事業所の中でも新しい取り組みを得意とする20歳～55歳。車椅子や杖歩行生活の方が半数近くで、活動の手助けを必要とされる方、視覚的なコミュニケーションを得意とする方、感覚や行動に拘りを持つ方など個性も様々。

スケジュール

［事前準備］
参加するスタッフは事前に映像を見ておく。

［当日］

2分	挨拶
3分	デモンストレーション
15分	一人ずつマイクに近づいて紙をつかって音を出してみる
10分	映像を見ながら紙を使ってマイクの前または手元で音を出してみる
5分	感想を聞く

準備物

マイク/スピーカー/プロジェクター/スクリーン/ノートパソコン/延長コード/紙
（A4サイズ・カラフルなもの）

準備されたマイクと
カラフルな紙
撮影＝南阿沙美

上映ワークショップ実施レポート—1

文=米津いつか

前回の訪問から約2ヶ月後の2022年10月28日、完成したばかりのオリジナルアニメーション『PAPER？/かみ？』を携えて、私たちは再び千葉県印西市の「いんば学舎·陣屋」を訪ねました。

右からファシリテーターを務めた梅原徹さん、蓮沼執太さん、水尻自子さん

撮影=南阿沙美

この日は、昨年から「劇場をつくるラボ」に関わっているプロジェクトメンバーの梅原徹さんがファシリテーションを務め、音楽を担当した蓮沼執太さんと、アニメーションを担当した水尻自子さんも一緒に、作品のお披露目上映と鑑賞ワークショップを行いました。8月のワークショップに参加してくれたメンバーのみなさんとは、約2ヶ月ぶりの再会となりました。

マイクを通して紙の音を出してみせる蓮沼執太さん

撮影=南阿沙美

完成した映像を流すプロジェクターとスクリーンの他に、タイトルにも入っている「紙」（A4サイズのカラフルなもの）と、マイクとスピーカーを用意しました。2台の机の上にそれぞれ用意されたマイクの前で、蓮沼さんが紙を使って音を出してみます。そのあと、時間をたっぷりかけて、メンバーのみなさんにもマイクのところで紙をやぶいたり、くしゃくしゃしたり音を出してみてもらいました。梅原さんは「自分が出した音が（マイクとスピーカーを通して）大きな音で聴こえる体験が大事」だと言います。自分が奏でる音に注目する機会は日常生活ではなかなかないかもしれません。

メンバーもやってみます

撮影=南阿沙美

紙に触れて音を出すことに慣れたあとは、いよいよ完成した映像作品『PAPER？/かみ？』の上映です。支援者の方と一緒にぴらぴらと紙を動かす人、ゆっくりとマイクの近くに行ってみる人、中にはぼーっと映像を眺める人も。中盤、音楽が盛り上がると、カラフルな紙が動く様子が一気に広がりました。

『PAPER ？/かみ？』の映像を見ながら音を出します

撮影=米津いつか

終了後、参加してくれたメンバーさんに上映&鑑賞ワークショップの感想を聞いてみました。「怪獣が食べているみたいな音がした」

「ポテトチップスみたい」という音に対するコメントや、「ビリビリする音が楽しかったです」と話してくれたり、音声の出る指差しコミュニケーションボードを使って「ま」「た」「や」「り」「た」「い」と伝えてくれたり、とても積極的な反応がありました。

楽しかったことを
笑顔で伝えてくれた
メンバー

撮影=南阿沙美

終了後にみんなで
記念撮影

撮影=南阿沙美

音を出したあとの痕跡

撮影=米津いつか

課題や発見のふりかえり

よかった点や難しかった点

いんば学舎·陣屋 一ノ宮敏江さん

特性的に視覚的なコミュニケーションが得意な方が多い為、目で感触が伝わるような映像は良かった。メンバーの感性を計り知る事はできないが映像内容が難しいところもあったように感じた。又、繰り返される映像が好きなメンバーが多いのでそのような点がはまっていたように思った。／生活の中にあるいろいろなアイテムの音を意識的に聞いたり感じたりする事で、新しい体験を楽しんでいる様子だった。参加メンバーのワクワクや興味が伝わってきた。

ファシリテーター 梅原徹さん

映像を見ながら音を考えるのはとても難しいのでデモンストレーションを丁寧にやる必要性を再確認できた。日頃ふれている素材にもう一度向き合うことで生まれてくるアイデアを育てていきたい。その魅力を再発見することから作品全体の見え方が変わるとそこにしかない鑑賞体験ができると感じた。

準備物について

いんば学舎·陣屋 一ノ宮敏江さん

障子紙を張って指で穴を空けるような体験があれば映像とのマッチングもあって楽しかったかもしれない。／移動用のマイクや大きなスクリーン、またはスクリーンが数台あって色々な角度や視野から音や映像を感じとる事ができたら良いなと思った。

作品の活用について

いんば学舎·陣屋 一ノ宮敏江さん

日常的にある物から角度や発想を変える事で新たな五感を自由に働かせられる事がわかりメンバーとの関わり合いの中でも可能性を感じた。特別な事をしなくてもメンバーのアート活動に触れる機会を増やしていきたいと思った。

撮影：たんぽぽの家（上・下）

たんぽぽの家 アートセンターHANA

［実施日］
2023年1月7日（土）
〈午前の部〉10:45－11:50
〈午後の部〉13:45－14:45

［実施場所］
社会福祉法人 わたぼうしの会
たんぽぽの家 アートセンターHANA
住所｜奈良県奈良市六条西3-25-4

［参加者］
メンバー 9名

［ファシリテーター］
佐藤拓道（たんぽぽの家）

［スタッフ］
行方雄大、中島香織、矢野夏実
（以上、たんぽぽの家）

ねらい

・最初に音なしで映像を上映することで「どんな音がするだろう？」と参加者が考えるきっかけをつくり、想像した音を実際に作ってみる。

工夫のポイント
（佐藤）

・色々な日用品を揃え、会場にディスプレイすることで道具に興味を持ってもらう。
・映像に出てくる「指で紙に穴をあける」という行為から出てくる音を試せるように、木枠に紙を貼った簡単なアイテムをつくった。
・映像に出てくる様々な日用品から連想されるアイテムを用意して、音を出せるようにした。
・手の動きに制約がある人のために、触れるだけで音が鳴るような、ハンガーラックに新聞紙を吊るしたセット等も用意した。
・自分が出した音をきちんと認識できるように、マイクとスピーカーを用意した。

参加者の特徴

車椅子利用の方、知的障害のある方、脳性麻痺による上下肢麻痺や不随意運動のある方。20代～60代の女性2名、男性7名。

スケジュール

［事前準備］
担当スタッフと映像を見つつ、趣旨や当日の流れやメンバー向けの工夫を確認。日用品を中心に準備。

［当日］

午前の部	午後の部
5分 趣旨説明	40分 午前の続きで選んだ物を使って音を出してみる
10分 映像を無音で鑑賞する	10分 音付きで通し映像を上映し、それぞれお気に入りの箇所で音を出しながら鑑賞してみる
10分 気になるシーンと、気になる物を選ぶ	10分 感想を話す
20分 気になるシーンを思い出しながら、選んだ物を使って音を出してみる	
10分 休憩	
10分 引き続き、選んだ物を使って音を出してみる	

準備物

マイク／スピーカー／大画面のテレビモニター／紙（トイレットペーパー、ティッシュ、模造紙、新聞紙、封筒、障子紙、紙袋、ダンボール）／ペン／ペットボトル（水が入っているもの・空のもの）／箸／スプーン／コップ／洗面器／水差し／結束バンド／風船／ウィンドチャイム／和太鼓／箱／ビー玉／ゴミ袋（ビニール袋）／掃除用具

準備されたものの一部

上映ワークショップ実施レポート―2

文=米津いつか
撮影=
たんぽぽの家

たんぽぽの家・アートセンターHANAでの上映ワークショップは、午前と午後に時間をわけてじっくり行いました。紙の他に日用品やいくつかの楽器が用意されています。

ファシリテーションを務めたたんぽぽの家の佐藤拓道さん（上・中央）とメンバーたち（下）

〜〜〜〜〜〜

はじめに10分間、みんなで音無しで映像を見ます。それからメンバーたちは、用意された様々な物の中から気になる一つを選んでいきました。ろうそくが気になったという人、コップから水が溢れたのが気になった人、そして、映像には登場しない「洗濯機」という声もあったり。

〜〜〜〜〜〜

次に、気になったシーンにどんな音がしそうか実際に物を使って鳴らしてみます。例えば、指でプスプスと紙に穴を開けるシーンが気になったメンバーは、スタッフがあらかじめ準備していた枠に貼られた和紙にお箸で穴をあけていきます。「プスッ」といい音に「障子！」という声も。円柱の紙箱を持参したメンバーは、中にビー玉を入れてもらい車椅子のテーブルの上で転がそうとします。はじめはなかなか転がらなかったのですが、しばらくすると床に落下。劇的な音が響きました。ろうそくが気になった永富さんは、板状の段ボールに立てた空のペットボトルを養生テープで留めつけています。気になったシーンのイメージを形で再現しました。水を入れるシーンが気になったメンバーは、花台の上においたペットボトルからコップにスタッフに水を注いでもらい、そのコップを洗面器に向かって落としてもらうという2段階のディレクションをしていました。活動は午後へと続きます。

持参した箱の中にはビー玉が（上）、ろうそくの形状を再現して音を出す（下）

〜〜〜〜〜〜

午後は、気になったシーンを再生し、そのシーンに合わせて一人ずつ音を出してみます。

〜〜〜〜〜〜

蛇口から水の出るシーンが気になったメンバーは、映像に出て来た二つの蛇口のうち、ポタポタと垂れる方のイメージだったようで、音が大きすぎてやり直したり。佐藤さんは何度も丁寧に「どう？イメージに近い？」と聞いて納得するまでやっていきます。指で穴をあけるシーンが気になっていたメンバー。映像では指で次々と穴を空けていきますが、そのスピードはちょっと早そうです。自分のペースで枠に貼られた紙にお箸で穴をあけ、しっかりとした音を出していました。

〜〜〜〜〜〜

映像をじっと見ながら
取り組むメンバー

お箸で穴を開けるのは
見ている方も爽快でした

時間をかけて、一人一人全員が気になったシーンにあわせて音を出したあとは、初めて音付きで映像を流してみます。 自分が選んだシーンの他にも、 音を鳴らしたくなったら鳴らしてOK。自分たちでつけてみた音とどんな違いがあるでしょうか？

前半のおだやかなテンポのときは、みなさん、寝ているのかしら……？というくらい静かな雰囲気がありながら、ペットボトルに入った水をおもむろに取り出して振るメンバーの姿も。しかし、ほとんどの人は静かに座ったままで、映像と音楽に合わせていくことはなかなか難しい様子でした。

印象だったのは、映像のシーンを再現するようにして音を出したり、音を出すための物へのこだわりでした。コップに水を溜めて、落として、2段階に音を出すことや、ろうそくの形状を作って音を出すことなど。お箸を使って穴を開けると思い切った音を出せるという発見もありました。楽器もある中で、身近な物を選び、音に向き合う姿が心に残る時間になりました。

課題や発見のふりかえり

よかった点や難しかった点

たんぽぽの家 メンバー

アニメに音をつけるのは楽しかった。／音をつけてみたけど、タイミングが合わなくてうまくいかなかった。／紙袋にビー玉を入れたりして楽しかった。やりづらくはなかった。／水を使ってやったけど、思った音と違っていた。頭で考えていることと、実際に違いがあった。

たんぽぽの家 佐藤拓道さん

鑑賞だけでなく、音を想像することがとても有意義だった。想像していた音と実際に鳴らしてた音が違うという意見も大事で、「想像と違う」ということは「発見」でもあると思った。

準備物について

たんぽぽの家 メンバー

障子紙と洗面器があってよかった。他のメンバーが洗面器を使っているのをみてよかったと思った。／紙袋とか気に入った。ぐちゃぐちゃにする事ができてよかった。／ビー玉とか使えて面白かった。／色々と使ってみたけど、自分の想像と違う音だった。

たんぽぽの家 佐藤拓道さん

水や新聞紙、ビー玉、ペットボトル、障子紙を貼っておいた枠もよかった。
障害のあるメンバーにとっては、片手で扱えるもの、固定して動かして音が鳴るものなどスタッフが準備せずとも自分の力で音を鳴らせる（鳴らしに行ける）ものをもう少し多めに用意して、自由に音探しができる環境を作れるとよかった。

作品の活用について

たんぽぽの家 佐藤拓道さん

音をつけるWS以外には、気に入った場面に言葉をつけるなどやってみたい。最終的に言葉をつなげて詩のようなものになる？みたいなもの。

ほっちのロッチ お出かけDAY!

［実施日］
2023年1月21日（土）
13:30－14:30

［実施場所］
追分ナンデモリ体育館向かい校舎内
住所｜軽井沢町追分824-1

［参加者］
3歳〜小学校低学年の10名

［参加費］
1,500円

［ファシリテーター］
梅原徹

［ファシリテーション 協力］
佐藤拓道

［スタッフ］
唐川恵美子（ほっちのロッチ）、
中村茜（まるっとみんなの調査団/株式会社precog）
米津いつか

［企画］
一般社団法人ドリフターズ・インターナショナル

［支援］
信州アーツカウンシル
（一般財団法人長野県文化振興事業団）
「令和4年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業」

［主催］
まるっとみんなで準備室/
まるっとみんなで映画祭 実行委員会

撮影-米津いつか（上・下）

ねらい

・楽器以外のものから出る音に耳を傾け、知的障害のある人でも子供でも、楽器がつかえなくても、音楽を奏でる体験をつくる。

工夫のポイント
（佐藤・梅原・米津）

・楽器と紙のほかに、アニメーションにも出てくるようなものを用意した。
・バケツやたらい、計算機など日常で目にするものも多く用意した。
・楽器や物の間隔をとって並べ、一つ一つの魅力が出るように設置した。

参加者の特徴

ほっちのロッチのアトリエに通う3〜8歳までの子どもたち。音楽や工作に興味のある子どもたちが中心。1人で参加した子は2名、親子やきょうだいで参加したのは3組。知的障害や医療的ケアと共に生きる子は2名、そのきょうだいが2名。

スケジュール

［事前準備］
先行して上映ワークショップを実施したたんぽぽの家の佐藤さんにミーティングに加わってもらい、アドバイスを伺いながら進行台本を準備した。

［当日］

5分	自己紹介・素材紹介
5分	素材に触れて音を探してみる
15分	気に入った素材の音をマイクを通して聞いてみる
10分	好きな映像のシーンを無音で流して音をつけてみる
10分	映像のシーンに、映像の音を流して聞きながら、さらに自分たちで音をつけてみる
10分	通しで映像を流し、セッション
5分	感想を話す

準備物

マイク/マイクスタンド（小さいもの）/スピーカー/テレビモニター/ボンゴ/鉄琴/太鼓/マラカス/太鼓/チャンチキ/バケツ/たらい/ほうろう鍋/紙（A4色紙、模造紙、新聞紙、封筒、障子紙、紙袋、ダンボール）/ペン/ペットボトル（水が入っているもの・空のもの）/大きな布/箸/紙コップ/結束バンド/おせんべい/ゴミ袋（ビニール袋）/ブラシ/ホチキス/計算機/ハンガー/買い物カゴ

準備されたものの一部

上映ワークショップ実施レポート—3

文・撮影＝米津いつか

長野県軽井沢市にある「ほっちのロッチ」は、診療所とともに大きな台所や・アトリエなどがある町の人の居場所です。ここで定期的に開催している、アトリエの外へ飛び出しアート体験をする「お出かけDAY!」とのコラボレーションで、「お出かけDAY! 梅原徹さんとあそぶ音とセッションの世界！」と題して上映ワークショップが行われました。軽井沢町追分にある現在は使われていない校舎の一室が会場です。

会場の床には、楽器や日用品がたくさん並んでいます。太鼓やマラカス、鉄琴といった楽器にまざって、バケツ、プラスチックのたらい、紙袋やおせんべいまで。ファシリテーターの梅原徹さんが、どんなものがあるか一部を紹介していきます。ペンが入ったカゴを手にとって、「かごを振っても音が鳴るし、ペンの蓋をとっても音がなりますね。」と「ポンっ」と鳴らしてみせたり。アルパカの爪の楽器を見せると「こわーい！」と子どもたちならではの反応も。

並んでいる物や楽器を紹介する梅原徹さん

それから、実際に手にとって叩いてみたり、どれがどんな音が鳴るのか試していきます。いろいろ試したら、今度は気になったもの

のを使ってマイクを通して音を出してみます。バケツのなかに、ペットボトルやハンガーなどを入れて、両手で力一杯振って紹介してくれた人、プラスチックのたらいをひっくり返して裏の溝をブラシでこすると「ノコギリみたい」という声が聞こえてきます。みんな会場を歩き回って、たくさんの音を出したり聞いたりしていきます。大きな障子紙が出てくると、みんなで叩いてみたり、やぶいたり。計算機をパチパチと叩いて音を出したり、ボタンをなぞってみると音が違うことがわかったり。

たらいの裏の溝とブラシを使って音を出してみる様子（左）と計算機をつかって音を鳴らすアイデア（右）

マイクを通して物の音を聞いたあとは、『PAPER？/かみ？』のシーンを音無しで部分的に切り出して流します。蛇口から出てくる水はどんな音？ 映像を見て、想像しながら音を出してみます。紙の上にマグカップが載っていて紙が引き抜かれると同時にカップがひっくりかえるシーンを、メジャーを巻き取る音で表現した人がいました。三角の透明な物体の中に水のようなものが入っていて回転するアニメーションでは、たらいの上に計算機を置いて、右手では計算機を、左手ではマラカスを持ちながら、回転にあわせて叩いていったり。おせんべいの袋を振って、音を出したり。今度は、シーンごとの映像を音ありで聞きながら、さらに自分たちで音をつけてみます。

そして、最後にいよいよ通しで映像を見て、セッションしていきます。最初は映像に合わせて出していた音もだんだんと、リズムを

合わせる方に集中していきます。両手に持った空のペットボトルで交互に自分の頭を叩くなど、楽器や道具を変えたりしながら、みんな10分間ノリノリでリズムを刻んでいました。

みんなで映像も
しっかり見ていました

最後まで大事に
抱えていた物を入れた
バケツ

セッションが終わって感想を聞いたところ、マイクに向かって叫び声をあげる子どもが連鎖してしまってじっくり聞けませんでしたが、梅原さんからは「家にもたくさん音が眠っています。帰ったら探してみましょう。」と日常の中でも音を発見してみてほしいと伝えられました。

課題や発見のふりかえり

よかった点や難しかった点

ほっちのロッチ 唐川恵美子さん

短いカットが多く、単純な動きなので、子どもの興味を引きやすかった。/元々入っている音も不思議な音が多くて面白かった一方、冒頭の映像の音を「こわい」と感じた子がいたようだ。/それぞれのアイデアに共感したり、聞き合ったりする時間を取れるとよりよかった。

ファシリテーター 梅原徹さん

それぞれがお気に入りの音を発見している様子が垣間見れた。素材を組み合わせて自作楽器のようなものを作っている子もいた。年齢層が低めでWSの趣旨と逸れてしまう時もあったが、要素を絞るか年齢層を広げるかで解決できると考える。

準備物について

ほっちのロッチ 唐川恵美子さん

モニターがあると、映像が鮮明でよいと感じた。遠くや斜め上を見るのが難しい寝たきりの姿勢の子にとっては、モニターを近くから同じ目線の高さで見られるとよい。/ゴミ袋(片付けの時に使うもの)があるとよかった。

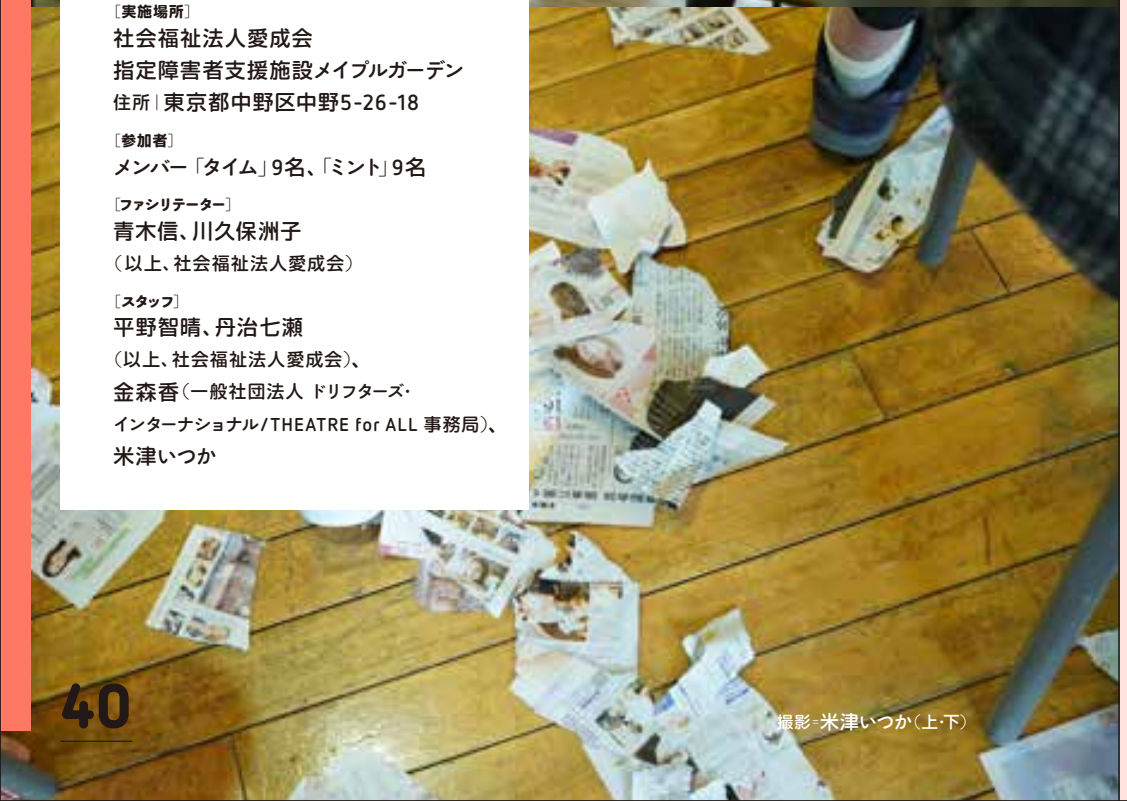
たんぽぽの家 佐藤拓道さん

たくさんの道具をズラリと並べたので、初めから子供達が道具に興味を持ってくれていた。/日用品の音を色々実験して、こんなのどう?と発見している姿が楽しそうで良かった。/寝たきりの子が自分で道具を選べる環境をもう少し工夫できれば良かった。

作品の活用について

ほっちのロッチ 唐川恵美子さん

普段のアトリエ活動で手持ち無沙汰になった時の合間に休憩しながら上映すると良いかもしれない。映像から得たインスピレーションでもう一度創作活動に戻るきっかけとして。



愛成会
メイプルガーデン

［実施日］
2023年3月17日（金）
〈午前の部〉10:30－11:30
〈午後の部〉14:00－14:45

［実施場所］
社会福祉法人愛成会
指定障害者支援施設メイプルガーデン
住所｜東京都中野区中野5-26-18

［参加者］
メンバー「タイム」9名、「ミント」9名

［ファシリテーター］
青木信、川久保洲子
（以上、社会福祉法人愛成会）

［スタッフ］
平野智晴、丹治七瀬
（以上、社会福祉法人愛成会）、
金森香（一般社団法人 ドリフターズ・インターナショナル/THEATRE for ALL 事務局）、
米津いつか

撮影=米津いつか（上・下）

ねらい

・参加型鑑賞のおもしろさに触れ、映像を立体的に楽しんでもらう。

工夫のポイント
（青木）

・からだを動かすことが好きなメンバーが多いので、「声」と「からだ」を使って
・材料は「紙」に絞り、発語がない方も一緒に参加できるものを用意した。
・注目されているという認知からの活動意欲向上を図るよう務めた。

参加者の特徴

全員女性、平均年齢55歳。音楽、ダンスが好きな方、他者との関わりが好きな方が多い。新しいことにチャレンジしたい方もいればのんびり過ごしたい方も。介助が必要な方が1/3程度。車椅子利用者、自閉症の方、動き回るのが好きな方など。言葉のコミュニケーションがとれる方は半数程度。

スケジュール

［事前準備］
事前に映像を見る/プロジェクトメンバーとの打ち合わせ/先に実施した「たんぽぽの家」や「ほっちのロッチ おでかけDAY!」の記録などの閲覧

［当日］

午前の部	午後の部
10分 自己紹介・趣旨説明	10分 好きな紙製品を選ぶ
10分 映像を見る	10分 映像に合わせて音を出したり、からだを動かす練習をする
40分 1シーンずつ映像に紙で音をつけたり、からだを使って表現してみる	10分 本番！
	15分 感想を話す

準備物

テレビモニター/ノートPC/スピーカー・マイク（カラオケ機材）/さまざまな紙製品（コピー用紙、模造紙、和紙、新聞紙、雑誌、カレンダー、箱、牛乳パックなど）

準備されたたくさんの紙製品とカラオケ機材

上映ワークショップ実施レポート—4

文・撮影＝米津いつか

今年度の上映ワークショップの最後は、東京・中野の社会福祉法人愛成会が運営する指定障害者支援施設メイプルガーデンにて実施。平均年齢55歳の女性のメンバーたちが参加しました。はじめに、音付きで10分の映像を見てみます。映像を見ているときに、何気なく足先でリズムをとってみたり、ふわっとした音に合わせて隣にいる人をタッチしている人もいました。

映像を見るメンバーたち

映像が終わって、ファシリテーターの青木さんがメンバーのみんなに呼びかけます。「何が出てきた？」「猫！」「他には？」「猫！」と猫の印象が強い様子。「映像に紙がたくさん出てきたので今日はいろいろな紙製品を用意しました。」と青木さん。

それから、一つずつのシーンに、一人ずつ動きや音をつけてみます。はじめにスタッフの川久保さんがやってみます。冒頭の映像に合わせて「ひゅ〜ん」という音をマイクで言いながら、コピー用紙を手にとって、紙をひらひらと動かしました。とても元気なメンバーからは、すぐにやってみたいと手があがります。同じシーンを、指先をひらひらさせながら、腕を大きく回して円を描くように動

かして表現したり。だんだん調子が出てきたみなさんは、カレンダーを勢いよく切り離したり。ぴんと貼った新聞にパンチで穴をあけたり。盛り上がったところで、午前の部は終了です。

マイクを使いながら紙で音を出してみるメンバーたち

午後の活動では、 まず机に広がるたくさんの紙製品から好きなものを手に取りました。カラフルな紙を選んだり、大きな紙をもったり、箱を選んだり、何枚もの紙を持ったり。じっくり選んだあと、映像が流れると、すぐにみなさん、手に持っているものを振ったり、ノリノリです。紙の音でリズムを刻む人が多いなか、からだをゆらゆらと揺らす人、細長い紙の向こうとこっちをスタッフと一緒に持って動かしたり、音楽を止めてもみなさんの動きは止まりません。

たくさんの材料の中から選んでいきます

練習はバッチリだったので、今度は10分の映像を止めずにやってみます。「静かなところもあるので、よく見てくださいね」と青木さんが添えます。ゆったりとした冒頭では、紙を一枚ずつ破り続ける人がいたり、後半のアップテンポになってくると、ストローを両手に持って箱を太鼓のように叩いたり、マイクを通さずともたくさんの大き

な紙の音が部屋中に響きます。賑やかな部屋の中で眠り続ける強者もいましたが、最後のシーンでは大きな紙に紙コップが投げ込まれ、これまでに見たことのない音の出し方もありました。

左｜くしゃくしゃ
まるめたり
右｜スタッフと協力して
音を出したり

終わってみての感想も、すぐに手が挙がりマイクを手に取るメンバー。「おもしろかったです」という感想に「どういうところがおもしろかった？」と青木さんが尋ねると「一緒にやったの！」「みんなに会えてうれしかったです」とコロナ禍で外から人が来ることも少なかったメンバーさんの気持ちも垣間見えました。

「いろいろなものを手に持って、体もいっぱい動かして、すごく楽しんでいる様子でした。音を鳴らさなかった方も、いい表情をして、雰囲気を楽しんでいる様子が伝わってきました」と青木さん。青木さんが計画に入れていた「オノマトペにしてみる」というのは難しく実施されませんでしたが、いつもみなさんの様子を見ているからこそのあたたかい言葉で締めくくられました。

鑑賞後には
きれいな紙片が
ちらばっていました

課題や発見のふりかえり

よかった点や難しかった点

メイプルガーデン 青木信さん

どんな音かな？」と想像したり、「やってみよう！」という気持ちになる映像だった。／紙＋猫やおにぎりなど、興味をひくものも出てきたところもよかった。

メイプルガーデン 川久保洲子さん

不思議な感じがするのがよかったし、シンプルな線の美しい絵で見ていて心地よかった。／色が濃いほうが映像を見やすい利用者さんもいたかもしれないと思った。／身体介助度の大きい利用者もいたので、ファシリテータ以外のスタッフがもっといるとよかった。

準備物について

メイプルガーデン 青木信さん

大きくつないだ紙は、音も大きく、身体も大きく動き楽しさにつながった様子だった。／マイクはコードレスの方が使いやすかったと思った。

メイプルガーデン 平野智晴さん

視力が低下している利用者さんがいたため、画面がもう少し大きい方がよかった

作品の活用について

メイプルガーデン 平野智晴さん

音を聞いて、絵に表現してもらってもおもしろいかもしれない。

メイプルガーデン 川久保洲子さん

みんなで同じ動きをして、ラジオ体操のように活動の準備運動として使う